

よみがえる門 見えた葵紋

二条城



1625年に建てられた二の丸御殿の正門「唐門」。金箔や彫刻細工が随所に施された美しい姿に圧倒される＝いざわれも京都府中京区

二条城が普請中だ。徳川家康が1603年に築城して以来初の本格修理が続いている。京都市が20年計画で2011年度から始め、これまでに新たな発見もあったらしい。

二条城と言えば、大政奉還など日本の歴史の移り変わりを見守ってきた世界遺産でもあり、京都屈指の人気観光スポットだ。城内の28棟が国宝や重要文化財に指定され、狩野探幽が狩野派が描いた重要文化財の障壁画は十面を超え、久し振りに行ってみたい。

城内に入ると、まず目を引くのは「唐門」だ。国宝の二の丸御殿の正門にあたる。

優美な曲線を描く唐破風を持ち、鶴や亀、不死を象徴する青い蝶など長寿や繁栄にちなむ彫刻で彩られている。大修が人形で再現され、見どころの一つだ。だが、京都市元離宮二条城事務所の鳥居将志総務課長は「実は大政奉還の場面を再現したものではなく、あくまで部屋屋根を受ける垂木の先には葵紋の飾り金具があるが、修理の結果、その下に徳川家の葵の家紋が隠されているとわかった。二条城は大政奉還で朝廷に移管された。明治中期に離宮になった。その際に改装されたらしく、やはりあるじが愛われればその紋も変わるのだろう。」

目下修理中は阪神・淡路大震災で構造がゆがんだ本丸御殿。この工事が24年3月に終わると、次は二の丸御殿といふ。その二の丸御殿は、徳川15代将軍の慶喜が1817年、大政奉還を明らかにした。

歩くど音が鳴る「ついで張りの廊下も、かつては侵入者知らしめるための工夫とされてきた。これも数年前から「長い年月を経て緩んだ床の固定金具と釘のずれで音が生じており、当初から意図されたものではない」との説明を掲示している。大修理が終われば音が聞こえなくなるかもしれない。鳥居さんは「どこを直し、どこをそのままにしておくのかが、十分議論していく必要があります」と話す。

来年1月4日から黒書院二の丸の特別入室も始まる。最近の城事情を見に、訪ねてはいかかろう。(渡義人)



二の丸御殿の大広間には、計16体の人形が並べられている＝京都市元離宮二条城事務所提供